

2010
うらそえYA文芸賞
受賞作品



短編小説部門 煌賞
軽便鉄道の夢 上間 美香

塾を出た途端、クーラーで冷えていた体が、真夏の夜の蒸し暑い空気に一気に晒された。僕は大きく深い溜息をつく。結局、今日も赤ちゃんに会いに行くことはできなかった。

小学生の頃は適に二、三度も赤ちゃんの昔話を聞きに行ったものだったが、中学一年生になってからももう三ヶ月も会っていない。九十二歳の赤ちゃんの曲がった腰と深い皺を刻んだ顔が頭をよぎる。とっさに僕はそれを振り払った。また次行けばいいさ。部活や塾で毎日忙しいのだから仕方ない。そう自分をなだめながら、時間を確認しようとケータイの画面を見る。九時半を回ったところだった。

大平バス停に差し掛かったときだった。木が生い茂った歩道沿いに、何か金属がきらりと光るのを感じた。どうせ空き缶か何かだろうと思っただけで通り過ぎようとしたが、

その瞬間またもや光を放つ。目を凝らして見てみると、そこには暗闇の中で枝や落ち葉に埋もれながらも、煌々と輝く鉄道の跡があった。確かここは小学校の社会科探検で先生が熱心に何か説明をしていた場所だった。赤ちゃんもよく話していた気がする。大昔に沖繩にも軽便鉄道という汽車が走っていたとか。それにしても、レールが見えるこの金属光沢は妙だ。まるで今現在も使用されているかのように感じさせるのだ。レールに手を触れてみようとしたそのとき、僕の耳はわずかなリズムを刻む重低音を察知し、素早く手を引いた。耳を疑ったが確かに音は次第に大きくなり、地面が小刻みに揺れた。次の瞬間、目の前が真っ白な煙に覆われ、あたりが急に静まり返る。僕は恐る恐るゆっくりと目を開けた。そこにあったのは大きな真っ黒い鉄の塊。紛れもなく蒸気機関車だった。

「つわぁ、凄いやー！」
汽車をこんなに間近で見るとは初めてだった。威厳に満ち、黒く輝くその車体は、ヨーロッパのような雰囲気をも醸し出す。どういわけか知らないけれど、僕がいま目になっているのは、大昔に沖繩で走っていたというあの鉄道に違いない。目の前の扉が、僕を誘うかのように鈍い音を立てて開く。一瞬たじろいだ。思い切ってゆっくりと車内に足を踏み入れた。途端に扉が物凄い勢いで閉まり、汽車が動き出す。

「ポップー」
まるで冒険の始まりを告げるかのように汽笛が鳴り響いた。誰もいない車内を見渡す。思ったより狭く、木でできた長椅子が向かい合っているだけの至ってシンプルな作りだ。僕はすぐ近くにあって椅子に腰掛けてみた。ふむ、なかなか良い座り心地ではない。

「お疲れさん」
「ふいに後ろからチルーが現れる。」
「あんし男前などー。ずっと働いてやーさしてらっしゃる。さあ、お家に帰ろう。アンマーがまーさん夕飯作って待っているよー」と言いながらチルーは既に走り出している。

「おーい、ちょっと待ってよ」
僕は疲れ切った体を奮い立たせ、必死に後を追う。すると、チルーが急に畑の隅でしゃがみ込んだ。やっこの思いで追い付いて息を切らす僕に言う。

「見て、この花きれいでしょ」
「今までに見たことのない、チルーの愛おしいものを見るような目線の先には、小蝶のような形をした白やピンクや紫の花々が美しく咲き乱れている。これまで花になど見向きもなかったはずの僕が、目立たずとも畑の隅で懸命に生きていたその姿に一瞬で魅了される。チルーが笑みを浮かべながら口ずさむ。

「えんじゅうの花の 咲く頃は…」
なるほど、小学校の頃音楽の時間に歌った「えんじゅうの花」とは、これだったのか。つられて僕も歌いだす。

「幼い時を 思い出す…」
僕は沈む夕日を背に、大きな歌声を山にこだましてながら家路を辿る。
しばらくするとおんほろな、でもどこか温かみのある音かき屋が見えてきた。庭には一頭の馬と、三匹の豚が珍しそうに顔を出してこっちを見ている。僕は会釈して前を通り過ぎた。

「アンマー、お母さんだよー」

「か」と見上げると、向かいの席に、ついでさつきまではいなかったはずの女の子が僕に大きく真ん丸な目を向けて座っている。年は僕と同じくらいだろうか。長い髪は器用に結い上げられ、細身の体にはつぎはぎの木綿着物を纏い、裸足を片方ゆらゆら動かしている。とても現代にいないような娘(こ)とは思えない。次の瞬間、少女は僕を指さして、腹を抱えて笑い出した。驚きのあまり、僕はそのまま固まってしまった。少女は笑いを抑えながら切れ切れに話した。

「あなた、その格好、何ね？この、侍さんよー？」
少女の眼には、笑いすぎて涙が浮かんでいる。部着姿の何がそんなにおかしいのだろうか。金縛りが解けた僕は笑われたことに急に腹が立ち、向きになって言い返してやった。

「そっこの格好こそ何だよ。お化け屋敷からでも抜け出したのかよ」
「オバケヤシキ？何ねーそれ」
少女はきょとんとしている。こいつ僕をからかっているのだろうか。いちいち説明している気にもなれないので、とりあえず話題を変え、少女が何者かを突き止めることにした。

「きみ、誰？」
「私はチルー」
名前も明らかに現代ものではない。昔の沖繩を題材にした本や映画によく出てくる奴だ。

「どこに住んでるの？」
「浦添さー。ほら、もうすぐ駅に着くよー」
少女が窓の外を指さした。目を遣ると、そこには信じられない光景が広がっていた。緑のサトウキビが風に揺れ、高台を見下ろすとスイカや芋畑、田んぼも広がっている。

「こっちはスー。厳しくて無口だけど、人一倍の働き者なんだよ」
お父さんが恥ずかしそうに照れ笑いする傍、チルーは続ける。

「隣に居るのがにーで、その隣が一番目と二番目のねーねー、これらは弟と妹。あ、そうそう、二番目のねーねーがおんぶしてゐるのは一番下の弟だよ」
あまりの家族の多さに混乱する僕を見て、赤ん坊がけちらけら笑う。

「この子は百日咳で、三ヶ月ずっと咳が止まらんかったけど、親戚のハーマーがフーバーの汁を飲ましてくれて、きれいに治ったんだよ」
老人は医者も同然なのだろうと僕は感心する。そこでお母さんが料理を運んでくる。とはいっても、座卓に乗ったのは大きな鍋に積まれた水炊き芋の山と、芋の葉が入ったおつゆの二品。

「今日はお母さんが来てるから、奮発しておつゆにせーめんいれたよー」
お母さんが笑顔で言うと、家族から歓声が沸き上がる。現代の食事からするとあまりにも質素だが、そんなことはどうでもいい。空腹な今の僕にはありがたい。

「くわっちーさびら」
家族皆で声を揃えて言うと、僕は手にか

その向こうには白い砂浜と青い海が、いつの間にか顔を出した朝日に照らされてきらきらと光っている。大自然を映し出すパノラマはもはや、僕が知っている建物や道路が混在し、キンザー基地が行む浦添ではなかった。どうやら基地ができるずっと前の、そう、戦前の浦添にやってきてしまったようなのだ。

「うっせーこまで来たんだし、良かったら私の村、見ていったらいいさー」
少女がそういうのと同時に汽車がスピードを落とし始め、駅らしき小屋の前で停車する。

少女は僕の手を掴み、一目散に列車を後に走り出す。その足の速いこと。サッカー部の僕も負けじと全力で駆け抜ける。なんて気持ちの良い風だろう。緑の澄んだ空気が僕の肺に流れ込む。しばらく走ると、民家が点在する集落が見えてきた。

「ここが私の村だよー」
道行く人は皆チルーのような着物を身に纏い、裸足で歩いている。女は頭に、男は肩に重そうな荷を担ぎ、見事なバランスを保っている。畑では、鎌や鎌を持った村人たちが土塗れに汗を流して働く姿がある。なかには僕と同じくらいの歳の子どももいる。

「でも私たちは学校に行かないの？」
「学校はほとんどが小学六年生まで、本当は中学校に行きたいんだけど、生きるために働かないといけないからね…」
チルーは遠くを見つめながら言った。「生きるため」か。想像もしなかった。なんだか当たり前のように聞いてしまった僕は申し訳ない気持ちになった。

「さあ、とうるはってないで働いて」
チルーはぼーと立っ立っていた僕の手に鎌を差し出す。生まれて此の方、畑仕事なんてじりついた。働いた後、家族揃って食べる飯がこんなに美味しかったなんて、この時初めて実感したのだった。

突然、「フー」と向こうで音がしたかと思うと、あちらこちらから似たような音が連発する。まさしく、芋生活が奏でるおならのファンファーレだ。どっと家族が笑いだす。なんて平和な家庭だろうかと。僕も思わず爽快なおならを一つ。

「ちょっとその時、遠くの方で汽笛が鳴り響いた。」
「あいつ、もう九時だ。早く帰らんと、あなたの父ちゃん母ちゃんが心配するよ」
チルーが叫んで僕を見る。夢見心地の僕は楽しさのあまり家に帰ることなんてすっかり忘れていた。お母さんがチルーに僕を駅まで送るように促す。家族全員が外に向いて見送ってくれた。

「また近く寄ったら、いつでも遊びに来なさいねー」
お母さんが僕の肩を叩いて言う。僕はお礼を言ってお辞儀をすると、既に先を歩いているチルーを追い掛けた。足元が見えないほどの真つ暗な畦道を、蛙の大合唱に包まれながら歩いていく。夜空を見上げれば、溢れんばかりの満天の星が輝き、その中心を乳白色に光る天の川が流れている。町の灯りが眩しい現代の浦添の夜空からは想像もつかない。その時だった。

「あつ、流れ星ー」
僕は青い光が空を横切るのを見た。
「違つたよー」
チルーが笑つ。ふと周りを見渡せば、何百いや何千もの螢が僕らを取り囲んでいる。ふわふわした青い光達は僕の頭や掌にも降り立つ。跳んで回ってはしゃぎながら、僕ら